

特集●いまさら文革、いまなお文革、いまこそ文革

「文化大革命」に見たもの

文革の背景にある国際情勢、伝統中国とさほど異なるところのない基層社会と民。二一世紀の中国は、はたしてどこへ向かうのか。文革以前から中国に関わり、その変化を見つめるだけでなく、様々に有意義な提言を行ってきた両氏に語り合っていた。

小島麗逸

大東文化大学
学芸学教授

×加々美光行

愛知大学
名誉教授

司会 三好章

愛知大学現代
中国学教授

三好 今日、アジア経済研究所（現日本貿易振興機構（ジェトロ）・アジア経済研究所）調査研究部で一九六〇年代から一九八〇年代まで、とりわけ文化大革命とその後の変動する中国を、政治経済を中心に多方面の分野にわたり研究されておりました小島麗逸先生と加々美光行先生にお越しいただいております。お二人は、ご紹介するまでもありませんが現代中国に止まらず、世界的あるいは歴史の視角から中国に接近し、中国と格闘してこられました。そのお二人に、「文化

大革命」に見たもの、と題して、二〇世紀の後半に入って間もなくの時期、同時代はもとより、現在の世界にも多大な影響を与え、あるいは痕跡を残している「文化大革命」（以下「文革」）に何を見たのか、民と社会にどのような影響を与えたのか、ということをお話しいただきたいと思えます。それによって、現在もなお「遺制」と認識され、時に復活が批判されている文革について、同時代史としての文革を検討することで、中国と世界が二一世紀の現在直面している現実と

中華人民共和国の歴史とがいかに関わっているかが見えてくると思えます。

文革期に人口が増大したのはなぜか

三好 まず、経済面からのアプローチをしていらつしやった小島先生から、お話をお願いしたいと思います。文革というところかく「混乱」という言葉がつきまとい、経済は混乱のきわみにあつたとばかり言われることが多いように思います。

そればかりがクローズアップされるっぽうで、小島先生は文革期においても人口が増えているのではないかと指摘なさったことがあります。そうした、一見矛盾する、混乱の中の人口増加の意味するものは何か、ということからお話を始めていただきたいと思います。

小島 一九八〇年代、国家統計局が前に戻ってGDPを含めた各種統計を公表するようになりましたが、それを見るとやはり人口が増えているんですね。一九六〇年の後半から六一年、六二年と、三万人とか四千万人とか餓死者が出ているのですが、その後は安定しています。もともと、餓死者を三千万とか四千万台とする人がいますが、私の推計では一七〇〇万人くらいではないでしょうか。それでも大変な数です。その後、その反動で農村でもの凄く人口が増えているわけなんです。

農村で人口が増えるとうなるのかというと、都市にまわす口糧を十分に取上げるのができなくなるんですね。その問題は、かなり大きかったのではない

でしょうか。特に人民公社の整頓のために六一年三月に広州で開かれた党中央工作会議で、劉少奇派が発した「農村人民公社工作条例（草案）」いわゆる「農業六〇条」というのがあったでしょう。集団化のレベルを下げて、大躍進の行き過ぎを是正しようとするものでした。ところが、毛沢東はそいつはけしからんと言って批判したわけです。それは結局、人民公社という組織をより集団化の高い状態へと立て直そうとすることなんです。それでは人民公社は何をやっていたかというところ、一つは農民から都市人口と軍隊用の食料を取り上げること、もう一つは金が無いから皆を動員して働かす。この二つをやって、しかも農民は外へ出てはいかん、生地まがちで生きよという、それが人民公社ですよ。生地まがちで生きよということ、農民が都市へ出た場合、あの頃の国際情勢からいって都市の食糧をまかなえないからなのです。一九六〇年以後、中国は食糧を輸入するようになりまし。それまでは輸入したことはなかったんですが、本当に飢えたこのとき

には二〇〇万トンとか三〇〇万トンと輸入しました。でも、それは主に軍隊用の食糧ではなかったのかと思います。そうした問題が、人民公社整頓の背後におそらくあったのではないかと思いますね。文革期になると、毛沢東が言ったとか言わないとかの言葉を並べた壁新聞がいっぱいありますが、都市が肥大化した場合にはブルジョワ階級が育つてしま、だからむしろ都市を小さくして解体していったほうがいい、というようなことがスローガンの壁新聞に貼り出されていきましたね。でも、それは文革初期だけですよ。後になると、そんな話はもうどこかへいつてしまわけてすね。そこには、多分そんなことを言っていられない問題が入っているのではないのでしょうか。

もう一つは、中国の一九六〇年代というのは今の北朝鮮と同じです。つまり、近代的な武器体系を作っていく時期なんです。この分野には、文革が全く入っていません。全く荒らされていないんです。武器装備の近代化には資金が必要で

すから、農産物を農民から取り上げて輸出しなければならぬです。その問題もおそらく背後にあったのでしよう。だから核実験や水爆の実験だとかミサイルの実験年表を作っていくと、その回数が一九六三年以後蓄積されていきます。そして、今の北朝鮮と同じように、その水準が上がってくるんですよ。超近代的武器の基礎を作った時期はこれだ、というように。軍事面での近代化を人民公社という制度が支えるという仕組みがあったのではないのでしょうか。北京には防空壕まで作ってしまいましたね。ハルビンでも作っていました。あちこちで穴掘れつて。ソ連が核を撃ちこんでくるという前提の国づくりをやらないと危ないぞという認識を、あの頃の指導者の中では毛沢東が特に強烈に持っていたのではありませんか。それを支える体制は何なのかといえば、いま言ったように農村からすればなんともかなるといふ人民公社体制だったんです。それでも、農村だけの人口と農村の耕地面積、食料生産量とをグラフに作ってみると非常に面白いです



小島麗逸 [Kojima Reitsu]

よ。急速に回復するんですよね、生産量が。
加々美 文革期に回復するんですか。
小島 そう、文革期に。農民は外へ出ることができないんだから、土でも耕しているしかないでしょう。実際、飢えて死んでいるからね。餓死者が何人も出ているから。摂れる栄養がなくなれば、一生懸命作るわけです。

「出身血統主義」と「五・七指示」

三好 次に政治の側面から中国に関わってきた加々美先生に、近代を克服してできた社会主義ならばあり得ないはずの、出身家庭の血統、階級によって本人の価値を決定視する「出身血統論」、あるいは「唯成分論」についてお話しいただきたいと思います。中国が今なお抱えている前近代性や普遍的価値観への拒絶反応にもつながる問題かと思えます。

加々美 この「出身血統論」の問題では、周恩来がかなり核心として関わってきます。一九六六年八月に文革の正式発動が、中国共産党中央委員会（八期一中全会）の「プロレタリア文化大革命に関する決定」によって決まりましたが、秋に周恩来が「促生産、鬧革命」（生産に力を入れ、革命をやる）ということを言って農村に文革を拡大してはならない、としました。それはつまり、農村はこれから秋の収穫の時期に入るのだから

ら、農村に文革を拡大してはいけないというのを絶対に守ってもらわなくてはならないことでした。それに対して、極左派として出てくる「連動」（連合行動委員会）とか「五・一六兵団」、あるいは湖南省の「省無連」（湖南省無産階級革命派大連合委員会）が批判を行うわけです。省無連はそれほど極左でもないけど、五・一六と連動は完全に極左で、むしろそういうことを主張する周恩来を攻撃するわけです。場合によっては周恩来の身柄を拘束せよという方向に走るわけです。そのことと出身血統主義は、非常に深い関わりがあります。出身血統主義を主張して立ち上がった紅衛兵というのは、八月三〇日の天安門における第二回紅衛兵大集会から登場してきます。

小島 六六年ですか。
加々美 六六年八月末の天安門における第二回の紅衛兵集会とは、毛沢東が紅衛兵を接見する大会ですね。第一回集会は百万人規模で六六年八月一八日に同じ天安門広場で行われています。これには初



……………加々美光行[Kagami Mitsuyuki]

期に結成された紅衛兵が参加しました。その後、後れて結成された紅衛兵が第二回大会に参加したのです。ですから先行していた極左の紅衛兵と比べれば、出身血統主義を主張する紅衛兵たちは出足が遅いんです。そのため、必然的に農村まで文革を広げるといよりは、都市で文革に専心するという傾向を持った人々でした。それは、極左紅衛兵から見ればどう考えても右翼日和見主義だったので、そのグループが実は「紅五類」（革命幹部・革命軍人・革命烈士・工人・農民。先験的に革命的とされた）ではなく

て、むしろ「黒五類」（「紅五類」の反対に、先験的に反動的であるため、常に批判粛清の対象とされた）に近い、つまり地主・富農・反革命分子・悪質分子・右派分子などの悪いレッテルを貼られた父親母親の子どもたちが多かったのです。社会主義教育運動（二九六三〜一九六六）の時期までにそうしたレッテルを貼られた青年たち、つまり「黒五類」の親を持つ子弟が立ち上がったのです。悪い出身であっても造反することができたのだ、と言って六六年八月末から立ち上がったわけです。党中央は当初はそうした紅衛兵の造反を支持していません。しかし秋の収穫期を過ぎた翌六七年一月から三月にかけて、正確には始まりは一月二〇日過ぎからですが、黒類分子の造反を弾圧するようになります。初期紅衛兵の「連合行動委員会」とか、「五・一六兵団」という組織は、むしろこの時期に活動を活発化させていきます。そうやって、この時期に周恩来を包囲して逮捕し、吊し上げよう、という方向に向かうのですね。

ですから、さきほどの小島さんのご説明から考えていくと、周恩来は、中国と自分が置かれた状況が分かっていたのではないでしようか。特に六四年に核実験に成功して中国は核武装しますが、それからわずか一年あまりで文革が始まります。本来は、毛沢東・周恩来主導のもとで行われた核開発と文革とは、関係していなければおかしいのですが、このことを中央の指導層は表に出せないのです。

表面化すると、武装の問題が造反の混乱に巻き込まれ、重大な問題が生じかねなかつたからです。つまり、近代化の根幹に関わる軍事の問題が、障碍に乗り上げかねなかつたのです。それで毛沢東は、軍への文革の波及を抑えに回つてしまつたのです。毛沢東は、もう少し早く林彪問題を片づけておきたかつたのではないかと思いますが、結局一九七一年まで、林彪問題の解決を長引かせてしまつた原因はそこにあります。

それ以外の問題で言えば、農村人口は増えているわけで、その意味で周恩来の意図である農村に文革を拡大させないと

いう点を、毛沢東はまさしく強固に支持していたので、どれほど紅衛兵が周恩来を敵視しようともそれを許さなかつた。それともう一つ、「促生産、鬧革命」の典型として言えば、毛沢東が六六年五月七日に林彪に宛てた書簡を、「五・七指示」として中共中央が全国に発しました。こ

れが、毛沢東が林彪に頼ろうとした最初ですね。本当に重要なポイントであつて、近代化路線に向かう点で林彪を頼りにしたのです。「五・七指示」は、日中戦争の最中、延安モデル（一九四一〜一九四二年の日本軍・国民党による包圍で直面した経済難を、大衆動員で乗り切つた）の中のひとつ南泥湾モデル（陝北の荒地南泥湾を八路军が開墾、「自力更生、刻苦奮闘」が旗印）を念頭に毛沢東が記したのである。それは一言で言えばコミュニケーション運動であつて、コミュニケーションの非常に大規模な増加に繋がる、と完全に毛沢東は思っていたのです。文革の理念や理想について言えば、その典型として困難な時期の一九四二年前後に、延安モデルの中核にあつた南泥湾モデル

が、つまり南泥湾に入った八路军が大規模な土地開発を行い、急激な生産増を実現したのだという思いが、毛沢東の中にあつたのです。そのことと、秋の刈り入れの時期に紅衛兵の反乱を毛沢東が抑制させたことが、表裏の関係として「五・七指示」として出てくるわけですね。

小島 要するに、この「五・七指示」というのは、分業廃止や生産と教育の結合、若干の中小工場の運営など、延安時代の南泥湾で一度やつていて、それを全国版でやらせるということですね。しかし、それだけで済むかと思いきや、そうではない。スローガンとしては「三大差別」（農業と工業、都市と農村、肉体労働と頭脳労働の格差）の解消というのを挙げて、実際の政策は「五・七指示」で行い、それを今度は都市に導入しようとするわけです。それが一九六七年一月の上海コミュニケーション（毛沢東が一時承認したが、二〇日ほどで「上海市革命委員会」に改編、コミュニケーションを断念）なので、上海のような巨大都市でもコミュニケーションをやれ、と指示したのである。当時の壁

新聞の中に、一九六〇年に毛沢東が発言したという「都市を大きくしたら搾取階級ばかり出てくる、だんなばかり出てくる」というものがありましたね。農民を村だとか郷だとかいう範囲内で循環させておいて、都市で必要なもの、国に必要なものだけは取り上げる、農民は外へ出てはいかんという思想が徹頭徹尾あるわけです。それが「五・七指示」という名前が出てくるわけです。しかし、指示を受け取るほうの紅衛兵なんか、そんな歴史的なこと全然知らないし、ましてや農村に住んだことのない、肥たごを担いだこともない都市の学生たちですから、頭の中だけで考えを回転させているわけです。だから、六六年には一時期、陝西省だったか甘肅省だったか、三〇万とか四〇万くらいの規模の都市で、実際に住民の戸籍をみな農村へ変わらせて都市人口が一〇万になったという記事が出たことがあります。それが本当にできるのかどうかと疑問に思っただけでも、しかし、本当だったら文革では凄いことをやっていると考えましたよ。

ところで、文革で私が批判しなかったもう一つのことには、反腐敗闘争があります。民衆レベルにおける腐敗ですね。その腐敗は、現在のような腐敗じゃなくて小さな特権、ちよつとした贅沢なんですね。例えば、家なんか見に行くと、高級幹部の場合には広い部屋の実真中にいくつかソファがあつたりするでしょう。そういうことを含めて、家の分配も同様に、階級によつて広いところから狭いところへと変化していく。そうしたことに気を配つて対応せざるを得なくなつたといふのは、根底に軍事費の問題があるからではないでしょうか。あれだけ急速に近代兵器を導入してゆくと、軍事費の問題が大変厳しくならざるを得ない。それを民から取り上げるには、それなりの対応が必要ということになるのではないのでしょうか。

六九年四月に開催されます。その直前の六九年三月頃が、一番深刻でした。具体的には、ソ連共産党中央委員会が北京を核攻撃するという話を持ち上がるのです。その時、つまりソ連は本当に中国を核攻撃するというような重大な決定を下すのに、アメリカと全く何の相談も連絡もなしでやつて大丈夫なのか、という問題が出てきたわけです。

小島 それがソ連の中に出てくるの？

加々美 ソ連の中のことです。実際、当時のニクソン政権にソ連から打診がなされたわけです。北京を核攻撃するけども、賛成してくれとまでは言わないが静観していてほしいと。ところが、キンジャー (Henry Alfred Kissinger 1925-、ニクソン政権の国家安全保障問題担当大統領補佐官) が一番反対したんですね。その結果、反対だけれども黙認するという態度さえもアメリカはとらないで、基本的にノーという回答をしました。その前からも中国国境は軍事的に相当不安定になっていたのですが、最終的に核兵器の使用を想定するところまでいってし

まったのが六九年でした。

小島 そうそう、それが北京で地下壕を掘り、ハルビンでも作りということに繋がっていたのですね。もう一つ繋がっているのは、核関係の施設を四川省や貴州省まで持つていくことを含めた「三線建設」(国防戦路上の配慮から進められた、軍事工業の内陸部移転)ですよ。穴を掘ってそこでやれという。そういう指示が出てくるよね。その背後にはソ連との核戦争が予定されているわけですよ。安藤正士さんの『現代中国年表 1941-2008』(岩波書店、二〇一〇年)を見ていたらちょうどその頃、六九年の一〇月一四日に党中央政治局の決定として、ソ連の軍事的襲撃に備えて北京在住の高級幹部の緊急疎開命令が出ています。安藤さんは、『中国二十世紀通鑑 1941-2001』(綫装書局、二〇〇二年)をもとにそれを拾っていますが、驚きましたね。これはもう日本の戦争末期と同じなんですね。徹頭徹尾、ソ連怖し、ソ連の核が怖い、いかにそれを防ぐかということが。指導部の頭の中にはそうしたことが

あるにはあるのですが、紅衛兵をやっている中学生や高校生にはそんなところまで分かりつこないでしょう。彼らは、煽れば高級幹部を引っ張り出して、吊し上げて喜んでいりし、裕福そうな家に入り込んで略奪しているのですから。加々美 そちらの方が面白いに決まっていますよ。

小島 もし、毛沢東たちが核戦争対策に専念して、政治運動をやらなければ、ソ連にそれほど恐怖感を感じていない中国人もいたわけです。そこまで、ソ連との核戦争に対応する必要があるのか、というような。だけど毛沢東は、徹頭徹尾、ソ連の核に一番の恐怖を感じていたと思いますよ。それが「五・七指示」だとか「三線建設」だとか、そういう実際の生活や政治運動として現れていくわけです。ですから、中国がソ連とどのくらい対立して、どのくらい経済が困窮していたのかということが分からないと実際のところは見えてこないのではないでしょう。か。紅衛兵運動だって、当初は反対派を失脚させるためにやったわけで

しょう。そのうちに混乱してしまつて、次第に滅茶苦茶になるけれど。中共中央の中の反対派連中の偉い人たちを落とすために、毛沢東がやったのですよ。そのスローガンとして「五・七指示」だとか「三大差別の撤廃」だとか、耳障りのよい言葉を作つたわけですね。それを、文革当時、日本にいる人たちはそうしたことを「都市のだんなは少なくなつていった」などと書いたのです。私もそれに近いことは書きましたよ、『世界』(一九七四年一月号)に「都市化なき社会主義は可能か」などとね。クエスチョンマークがつけられるのは、疑問があるからそうやったのだが、これは凄いいことだと思つたよね、あの当時は。

「林彪事件」と「対ソ恐怖」

加々美 そういう「三線建設」などを進める時に、林彪の軍事掌握は毛沢東・周恩来にとつても不可欠だったんですよ。だから九全大会で林彪を副主席において

しまうわけですよ。文革が始まって以来、「五・七指示」も含めて軍事というものが生産を支えるし、国力の衰退を防ぐ要だというふうには毛沢東は思わざるを得なかった。それが特に顕著に出たのが六九年の九大大会で、やり過ぎてしまったのです。林彪を党副主席にするが党規約に書き込むというほどに。そうなる、どうやって眼の前のソ連による核攻撃の危機を防ぐかという問題で、林彪を情報戦の中に組み入れることを毛沢東はやめるのです。つまり、米中接近の最高機密ですね。そうした米中接近という最高の国家機密を、軍のトップである林彪には知らせなかった。

小島 それは加々美さんの推測ですか。それとも、あの当時に関する暴露文献が何かに出てくる話ですか。

加々美 実際、反ソ・反米、反ソ修・反米帝という、アメリカ帝国主義とソ連修正主義という二大敵を抱えることによって、中国にとって軍事力は本当に不可欠なものになっていくと林彪が信じていたという文献上の証拠はいくらでもありま

す。しかしその背後で、米中接近を林彪が本当に知らなかったということは、実は私の推測です。周恩来が米中接近に関して内々に毛沢東と話し合った、という記録はあります。しかし、それは内々の会議で毛沢東と話し合ったわけで、そこに林彪は一切加わっていません。そこから、それを傍証として林彪は米中接近を知らなかった、と判断できるわけですね。それは一九七〇年の国慶節の時に、毛沢東が明言するのです。だから、それ以前の六九年四月から七〇年秋まで、林彪はそれを知らなかった。あるいは、七〇年の夏ぐらいには薄々気付いていたかもしれない。だけど、七〇年の秋に入るとまでは、林彪は確信犯ではなかったのです。そこで七〇年八月に廬山で中央委員会総会（九期中全会）が開かれた時、陳伯達（一九〇四—一九八九、毛沢東の政治秘書。『中国四大家族』長江出版社、一九四七年、人民出版社、一九五五年。『人民公敵介石』華東新華書店、一九四八年、人民出版社、一九五二年）が国家主席復活と毛沢東「天才論」（毛沢東を数

百年、数千年に一人の天才とする極端な個人崇拜論）をぶち上げ、林彪がこれを全面的にバックアップしました。その結果、陳伯達を除いた文革小組と軍とが正面衝突することになりますが、この時に毛沢東は文革小組の側に付いたんです。江青、康生、姚文元、張春橋のグループですね。こうして林彪と毛沢東は敵対関係にあることがはっきりしたのです。つまり、毛沢東が、中央委員会総会の席上、「天才論」を明確に否定したわけです。従って、林彪はこれ以降、毛沢東と自分とは、死ぬか生きるかの敵対関係に陥ってしまったということに気付いたのです。七〇年暮れにはもう完璧に分かってきたんですね。実際に七二年二月、ニクソンが来るわけですよ。ニクソン訪中については、七〇年の秋になるころにはキッシンジャーが言い出していました。それが表面化する七〇年の国慶節には、毛沢東はエドガー・スノー (Edgar Snow, 1905-1972) を天安門の壇上に上げました。それは、毛沢東が対米接近を表明するということです。その後に行わ

れた国慶節の宴会に、スノー夫妻を招いて歓迎するわけですね。その席上、毛沢東ははつきりとキッシンジャーの訪中の問題が、現在重要な課題になっている、と明言したのです。ニクソンを北京に呼んでもいいし、来たければいつでも大歓迎する、ということのスノーを前に語ってしまうのです。

小島 毛沢東が明言したというわけですか。

加々美 ニクソンが、北京に来たければ私はそれを大歓迎する、ということを宴会の席ではつきり言ったのですよ。

小島 だから、誰にそれを伝えたわけですか。

加々美 スノーに対してです。林彪に対しても、間接的に伝えたということですよ。小島 要するに、毛沢東がソ連の恐怖をとことんまで感じていたのだということは、極めて重要ではないのかということですね。その恐怖から脱却するための、政治権力内部での争いが出てくるわけですね。そうしていいのかどうか、けしからんという人もいるだろうし。文革期の

一連の政策をこのように見ていくと、その根は毛沢東の中にあつたのだと思いま強い対ソ恐怖心にあつたのだと思えます。だから、文革を考える場合に対ソ恐怖の側面がまずある。もう一つは、対ソ恐怖によって党中央政治局の中が、政治力学的にどのような権力構造になつたのか。それからもう一つは、やはり紅衛兵ですね。紅衛兵あるいはそれにまつわるもう少し下のレベルの騒動ですね。そういうふうに分けて考えないと、なかなか整理できないのではないかと、うな感じがするのです。ただ、繰り返し言えることは、毛沢東がもの凄く強い対ソ恐怖心を抱いていたのではないかと、いうことです。

加々美 そうですね。一九六九年の三月、四月の国境紛争時には、別にCIAを通さなくても、ソ連が中国に核攻撃を加えるのではないかという情報は結局、中国に伝わっていくんですよ。

小島 核攻撃するらしい、という可能性について。

加々美 それは大統領補佐官 (Chief of

Staff) のハルデマン (Harry Robbins Haldeman, 1926-1993) の回想録の中で出てくる話です (H. R. Haldeman, *The End of Power*, W. H. Allen & Co. Ltd., 1978)。ハルデマンは一九七三年にウォーターゲート事件で大統領首席補佐官を辞めます。回想録は日本語に翻訳されていませんけど。その中にあることなのですが、毛沢東がわずか一年で態度をひるがえすということは、最高指導者としては大変大きな矛盾ですよ。いずれにしても、その結果七〇年の国慶節の時には毛沢東はニクソンを招待するとスノーのいる宴会の席で語ってしまう。その時には、キッシンジャーは周恩来に対してすでに北京訪問の打診をしていました。ですから、ニクソン訪中受け入れという決定を下すには、まず対米接近という事実を公にしなければなりません。それを秘密のままにしておいて反米ということだけを言い続けていれば、ニクソン歓迎などは難しいですよ。毛沢東が国慶節を機会として米中接近を公にしてしまった瞬間から、林彪と毛沢東の絶対的

対決が始まるわけです。

小島 それは七〇年ですね。

加々美 そうです。一九七〇年八月の盧山での党中央委員会総会、九期二中全会が始まりますね。もちろん林彪は薄々は米中接近を感じていたと思いますが、今まで不倶戴天の敵としてきたアメリカ帝国主義と仲良くしてもよいと毛沢東があらさまに言ったということは、軍事戦略を立てる側にいる林彪にとっては決定的なことですよ。前年の六九年四月に九大大会で林彪が党副主席になった時は、アメリカ帝国主義とソ連修正主義の両者とともに敵として戦うのだから、中国は軍事を重視しなければいけない、だから林彪を副主席に抜擢するという路線が提起されたわけですから。

小島 しかし、毛沢東にとってはそれは矛盾ではないですよ。毛沢東という人は、現実の状況から考えてこういうふうな方針を変えたほうがいいのではないかと、そういうことを平気でやれるのです。別の言い方をすれば、権力を全面的に握っているからできたんだらうとは思

います。普通だったら、そんなことを少しでも発言すれば、同じくらい権力の人々が数人いる中だったら潰されてしまうだけでしよう。しかし、毛沢東とか周恩来は、そういうことができる人なのです。それは、彼らにとっては矛盾ではないのですから。毛沢東はそういうことを『矛盾論』の中に書いていますよ。主要矛盾は何か、ということ。主要矛盾はソ連との対決だ、ソ連からいつ核爆弾が飛んでくるか分からない、これが最大矛盾なのです。そうすると、他のことはそれに従属するもので、毛沢東にとってはそれ以外は、矛盾でも何でもないのだな。

加々美 毛沢東はそう考えたかもしれない。しかし林彪は違っていたのです。確かにそのころの中国は現在の北朝鮮と似ていて、軍事の近代化は毛沢東あるいは周恩来にとっても最優先だったんですね。五八、九年頃に、中ソ対立の種がまかれますよね。その頃から自主自力で核武装をやる。ソ連の核技術者に依存しないで、事実核技術者は全部帰国してしま

うわけです。自力で核武装を実現するという道を敷いて、そして、六四年の核実験の成功にいたります。しかし、毛沢東の中国が核武装という軍事近代化を実現したことが、ベトナム戦争の引き金になったのです。

小島 ベトナム戦争とは、どことどことの戦争ですか。

加々美 簡単に言えば、ソ連がベトナムへの援助、実際上は介入の度を深めていきます。それに対して、アメリカのジョンソン政権が、それを放置できないということになっていきます。とりわけ中国が核実験に成功した段階で、東南アジアのベトナムを起点として、赤化の波及というドミノ理論が他の地域にも及ぶという危惧を持つようになり、結局本格的な介入にいたったのです。

小島 アメリカの介入ですね。

加々美 アメリカの介入が始まるわけです。そのため、ソ連修正主義とアメリカ帝国主義の双方ともを敵に回す、六五年以降、中国にとってそれが不可避なテーマになっていきます。それが核戦争の危

機というところまで、六九年の春に高まってしまいました。そうなった時に、毛沢東と周恩来は米ソ両方の敵を腹背に抱えるというのではなく、アメリカとは和解するという路線を選択していったのです。

小島 要するに、一九六〇年代の世界に對して、毛沢東ないしは中共首脳部が重要な問題として描いている中で最も重要とされたのは対ソ問題、ソ連との関係はどうするかということではなかったのでしょうか。

加々美 もちろんそうです。

小島 ベトナムへの中国の援助というのは、そういう大きな枠の中での援助ですね。アメリカだつてそれなりに、U2型偵察機を飛ばしたり色々しているのですから。けれども基本的には毛沢東の言葉で言う主要矛盾です。その主要矛盾の側面というものがソ連の問題ですよ。それと文化大革命運動とがどう関連していたのかは、私にはよく分かりません。中共中央の高級幹部の間の政治的な権力闘争と、紅衛兵の活動とは區別して整理し

ないとだめでしょう。紅衛兵の問題はよく分かりませんが、ともあれ、そうした一番困難な時にいつも毛沢東が立ち戻るのが、まさにこれです。「三大差別の解消」だとかのスローガンで、民を引き付けてやってきたわけですね。あの当時は、農業と工業、都市と農村、肉体労働と精神労働の格差を解消するすばらしい運動だ、などと持ち上げて書いていた人がいましたよ、いま、名前は出しませんが。私はそんなことまで書けなかった。それは、「三大差別の解消」などは、毛沢東が民を引っ張っていくために掲げたスローガンであつて、およそ実態とは違っているからです。いつもそういう形で毛沢東の政治は動いていたのではないか、と思いますね。

「腐敗は潤滑油」

加々美 いまの時点で、文革を問題にする意味を考えなければならぬと思えます。そうなると、やはり一番大きい問題

は二一世紀の現代と文革の時代との大きな違い、時代のギャップというものが見られていることだと言えます。小島さんがあげられた「三大差別」でも、一九六四年時点の「三大差別」と現在の農業と工業、都市と農村、肉体労働と精神労働の格差を比較してみれば、最後の肉体労働と精神労働の格差はさておいても、前の二つを見ても、当時よりも現在のほうがはるかに深刻ですね。場合によっては何十倍という大きさに格差は広がっている。六二年一月、「七千人大会」と呼ばれる中共中央拡大工作会議が北京で開かれました。劉少奇と鄧小平が、事実上主導権を握って開催した大会です。これ以来、「調整政策」（「大躍進」の破綻を背景に、集団化の緩和など、一定の自由化がはかられた）が本格化しますが、毛沢東の目から見れば、「調整政策」というのはここでいう「三大差別」をより大きく広げてしまうものであり、そしてその格差の拡大の中から実権派「走資本主義的当権派」が現れるのだ、と言い始めていきます。つまり格差が拡大していけば

実権派が現れて権力を握るようになっていくという、荒唐無稽と思われた毛沢東の予言じみた批判が、いまの段階では現実となつていないのでしょうか。

特に「改革開放」政策は農村の改革から始まって一九八四年には都市改革に移っていきしましたが、いずれにしても、それ以来、八〇年代後半からは格差拡大が文字通り現実の問題になっていきます。とりわけ、一定の年齢以上の世代の中国人には、毛沢東の予言が当たったという思いが潜在的にあると思います。

小島 思いがあると思いますか。

加々美 中国には、まだ極左派というのがあります。

小島 いまでもあるのですか。

加々美 実際に自分たちを極左派だとはつきりと意識してるのは少数派ですが、一応は名のついた極左派があります。私にメールを送ってくるんですよ。

小島 中国から？

加々美 そういうグループは、早くから毛沢東の文化大革命の再来はあり得る、と言っていました。

小島 現在でも言ってるわけですか。夢のような話ですね。

加々美 決して多くはなく少数ですけれど、極左派は実際に存在します。ただ、習近平が現れた時から、そういう人たちはあまり強く体制批判をすることはしなくなっています。大変な集権化が始まって、個人独裁の方向に習近平がいきまよね。そして王岐山の下で腐敗除去に突っ走るといふように、その路線は見かけは文革と似てますよ。

小島 いや、違いますよ。

加々美 一番決定的に違うのは、社会の基礎から始められたものではないということですよ。

小島 要するに、腐敗っていうのはいつの時代でもどういふ状況でも必ず発生するのです。それを民衆運動で潰そうとしたのが、毛沢東。

加々美 そうなんです。だからああなつてしまったのです。

小島 民衆運動だね。特に文革の初期はそのことが非常に濃厚にあつたでしょう。ところが、習近平の場合は権力闘争

との関わりで、相手を上からつかまえずうというやりかたでしょう。ですから、民衆運動は関係ありません。それ以外のやり方で腐敗を減少させていくことができるのかというと、中国社会にはありえないではありませんか。毛沢東的なやり方はあるにしても、いまでは誰が上になつたとしてもできません。お前は公金を懐に入れておいてはならないかと民衆に呼びかけて批判させたところで、社会がついていきません。そうすると結局、上からやらざるを得ない。地方幹部に対して、ずいぶん取り締まったと思えますよ。この五年間に五三万人処分したと言っていますから。しかしながら、そこまでやったとしても、中国社会はそれで腐敗がなくなるというようなものではありません。腐敗が構造的になっているのです。

『財經』（北京・財經雜誌社）という雑誌があります。これはなかなか面白い雑誌で、腐敗摘発の特集を時々掲載します。驚いたのが甘肅省あたりの県の党書記が捕まった時には、誰からいくらくら

い賄賂が贈られていたのか、ざっと三〇四頁にわたって書いてある。同じ部署といつても、当然上下関係がありますね。ちよつと何かあると、みな賄賂を持つていくのですが、立場によっていくらくらいつらと、例えば千元とか五百元とかのように相場ができています。まさに、腐敗が構造化しているわけです。本当に驚きましたね。底辺の幹部というのは、そうなっているのだらうと思いますよ。

そんなのがいくらでも、あちこちにあって。それを中学生や高校生くらいの若者に批判させたところで、ああそうですか、というだけの話にしかありません。それに代替する腐敗の撲滅、あるいは減少させていく方法があるかという点、それが無い。結局、習近平がやったように、上から摘発していくしかありません。腐敗というのは、中国の権力機構の中の潤滑油ですね。潤滑油をなくしてはいけません。潤滑油と見れば立派なものではありませんか。それが無いと、社会が動かないような状況になっているのですから。日本のように官僚を含めてです

が、清廉潔白なものは中国にはありません。日本でしたら、例えば数人でコンパをやつても、幹事が会費を集めて、一人あたりいくらかかったか、どのくらい余ったかと計算して、それをコピーして渡しますよね。それが当たり前になっています。大東文化大学にいた大野盛雄先生（一九二五―、人文地理学者、東京大学東洋文化研究所名誉教授、元大東文化大学教授）がおっしゃるには、日本は不思議な国だね、幹事はそれだけ労働してんだから二割くらいピンハネしても当たり前前なのに、それができないんだ、と。倫理がきつすぎる日本の清潔さは、権力機構にある人を含めて、世界的にはちよつと特別な存在ですね。中国の場合は、もう少しどころか、ほんとうにひどい。歴史的にも汚職について書いた本がいくらかもあります。名前を挙げきれないくらいです。それが中国の「新常态」（二〇一四年五月、習近平が河南視察時に発言、高度経済成長から「安定成長」路線への転換と見る向きもある）か何か知らんけど、「常態」、正常な状態なので

す。それを今から改めるなど、そんなことでできません。政治運動でやるといつても、そんなのできやしません。

加々美 劉賓雁（一九二五―二〇〇五）

の『人妖之間』（『人民文学』一九七九年第九期）。小島さんがあげたような「人と妖怪の間」に出てくる、そういう人間が、自分がいる職場で汚職をやっているのを実際に目にした劉賓雁が、それを題材にして書いた小説ですね。それが大評判になりました。

小島 あの社会からは腐敗をなくせないし、なくしたらかえって駄目ですよ。腐敗というのは潤滑油なのです。それをピューリタンのに、あまりにもきれいなこと言つたつて長持ちしません。そんなことは、せいぜいやつても一年。毛沢東がいたからこそ、あの一時期、文革の初期にできただけの話にすぎません。あの社会では、誰であっても、叩けばほこりがいくらかでも出てきます。ですから、腐敗が社会あるいは政治上の潤滑油として機能していればいいのですが、しばしば

そこが落とし穴になることがありますね。そうした落とし穴が発生するかどうかということ、中国政治を研究している加々美さんに聞きたいのですが。どの程度腐敗したならば、権力は崩壊するか、ということですか。

どのくらい腐敗すると 政権は崩壊するか

加々美 その判断は難しいですね。最も決定的だと思われるのは、中共中央紀律検査委員会というのが実質的には法治機関ではないことです。監察と検察、裁判所、弁護士などという法的枠組みには入っていません。つまり、中央紀律検査委員会はそれらから完全に独立していて、情報公開を行う必要がほとんどありません。それなのに逮捕権も身柄拘束権も持っています。それは中国共産党中央の直屬機関であって、しかも法の枠から外れているわけですね。いわば超法規的党内機関ですが、同じ超法規的機関に党建設工作指導小組というのがあります。

習近平は二〇一二年党の第一八次全国大会直後の晩秋、その指導小組組長に、中共中央政治局常務委員会の委員だった劉雲山を責任者として任命し、党内整風運動を始めました。劉雲山は一〇〇万人ぐらゐは摘発するし、五万人ぐらゐは党籍剥奪のうえ肅清すると豪語しました。しかし、一年を経て実際は全くその数字に達しなかった。

小島 そういつても、二〇一七年の一〇月に開かれた中共第一九回全国代表大会では一五三万人と入っています。一〇〇万人どころではありませんよ。

加々美 党内整風とは別に、党内反腐敗運動があるのです。中央紀律検査委員会とはその反腐敗の指導機関です。この二つは党再建運動の車の両輪だったわけですよ。二〇一二年秋に、習近平はその中央紀律検査委員会の責任者を賀国強から王岐山に代えたのです。王岐山に交代してから摘発がかなり順調に進みました。一方、劉雲山は依然党内整風がなかなか進まず、二〇一三年の全人代を経て、夏前には批判が集中しました。劉雲山自身が

汚職に影響されていたからだという議論がありました。党内権力闘争という側面もあつたかも知れません。しかし、劉雲山は、結局第一九次党全国大会まで実際はまだ摘発を受けていません。反面、王岐山は、そこまで徹底してやったということです。一九全大会では、もともと七〇歳停年という年齢の問題がありました。が、その年齢の制限枠を破って王岐山は特別に中央政治局常務委員、つまり「トップ・セブン」といわれる枠組みの中に残るだろうと、前々からずっと言われていました。それは、汚職摘発の問題で功績があるからというのです。ところが、最終的には王岐山はその席から外れました。

小島 そういう細かい話を詳しく説明してくれたことは、ありがたい。しかし、それはともかく、中国の社会全体が、共産党支配の社会が腐敗で崩れるかどうか、ということに話を戻しましょう。そうした時に延安時代の話はもちろん、文革初期では汚職よりも贅沢でさえけしからん、と摘発しましたね。しかし、それ

もうまくいきませんでした。摘発をやる方同士が対立してしまつたのですから。今度、習近平になつて「トラもハエも叩く」といつて腐敗を摘発し始めたわけです。「トラもハエも」といつて摘発して、本当に中国共産党の権力機構というのは汚職を絶滅させるだけではないけな。とはいつても、そうした腐敗撲滅の動きが社会の骨組を崩すような程度にまでいかないで収まるかどうか、が問題ではないでしょうか。

要するに、一つの社会が腐敗していつた場合、それはどこまでいくのか。文革の初期の少年たちが立ち上がった時には、とにかく、何といつても清潔なものがあつましたよ。エドガー・スノーが『中国の赤い星』の中で描いていたのと同じような清潔さが。一九二八年に改編された頃の紅軍が掲げていた「三大規律八項注意」のような潔癖な倫理観もあつたのです。ところが、現在ともなると「三大規律八項注意」などというものは、全く皆無、もう影も形もなくなつてしまひました。例えば、習近平の義兄、つまり妻

彭麗媛の兄の名が、国際的租税回避行為を暴露した「バナマ文書」に出てきます。

また、最近の中国の金持ちの海外投資などを見ていると、これもすさまじい、桁外れのものですよ。アメリカやオーストラリアに留学させるのに、まず高級マンションを買つて、それから留学させています。これは財産分散と、海外を利用した財産の維持ですよ。そんな者が、数限りなくいるのです。オーストラリアのようなところでは、不動産価格が、中国の富裕層が投資するたびにグンと上がつていきます。これはカナダやアメリカでも同じです。日本には、まだあまり入つていませんね。北海道などで若干の所では、二束三文になつた山を買つていきます。オーストラリアやカナダでは、中国の金持ちはそういう行動をとつていますね。これは、やはり合法的であろうと思ひます。しかし、そうした行為が共産党の体制、官僚主義というものをつき崩すだけの要素となり得るのか、ということが知りたいのです。その眼で見て、文革初期の少年たちの清き心が、いま現在

いつたふうなつてゐるのか、ということを知りたいですね。

もう一つ、先ほど申したけれども、大都市というところには、いわば大都市病が出てくるものです。この数年間、中国の住宅問題ばかり扱つてゐるのですが、住宅問題では腐敗が限りなく出てきます。本当に、凄いものです。当然、政府も腐敗を押さえようとはします。例えば、偽装離婚による不動産購入は、深圳を皮切りに五年前から始まつたのですが、今では二〇いくつの都市で出てきています。これは富裕層の「上に政策あれば、下に対策あり」なのです。不動産は一人で複数購入してはいけないと政府が指示を出すと、偽装離婚して住宅を買つてゐるのです。そして、それに対して国有銀行までが、平気で資金を貸しているのが現実です。

中国は、こうした状況でそれなりに上手くいく社会なのではありませんか。汚職があつたり、不正が存在してゐて、それがないと動かない社会なのです。ですから、腐敗は潤滑油ということになりま

すね。文革などの理想を真に受けたやつが悪いんですよ。例えば、先にあげた「三大差別」です。これについて、一生懸命に論文を書いた人も日本にたくさんいました。私も、いくつも文革時代に論文を書きましたが、「工農差別」（農業と

工業の格差）、「城郷差別」（都市と農村の格差）とか肉体労働と頭脳労働との格差の解消に向かうための大運動って、そんなバカなことは書きませんでした。これはスローガンとして掲げているだけなのです。スローガンというのは、この政治運動だって実現されたためしがありません。どこかにありますか。フランス革命の時のスローガンだって、そんなもの実現されてなんかいませんよ。加々美 行き過ぎると、反動が起きるからね。

小島 私はもうお墓が近いから、あまり真面目に考える気になれません。腐敗やら汚職に対する怒り、というものはあるでしょうね。だけど、それは一度か二度あるとか、一人か二人ではそう思うかもしれません。千人とか一万人で不満を爆

発させるような問題ではありませんね。加々美 僕らが中国人で、もし中国国内に住んでいたなら「怒髪天をつく」くらいに感じるはずなのですが、どうですか。

民は、しぶとく生きる

小島 あなたは文学者だからなあ。私はいさようではありませんからね。さきほど加々美さんが話されたことですが、二一世紀の今は、一九六〇年代の農村と都市の格差から比べたら、何十倍、何百倍も広がっています。でも、それでもいいのではありませんか。飢え死にしているわけでもなし、世の中で結構がきながら子どもたちを学校へ入れてますよ。それの何が悪いというのですか。腐敗があってもいいでしょう。それだけの教育を受けさせる余裕があれば、子どもたちはしっかりするものです。百人か千人のうち一人くらいは、立派なのが出てきま

すよ。それでいいではありませんか。昨晚（一〇月二六日）、BS8チャン

ネルに東大の阿古智子さんが出ていて、加々美さんがさきほど言ったようなことを話していました。二〇年前に比べたら、大変なものだ。農村と都市とを区分けしたら格差が拡大しているし、同じ都市の中でも同じようになっている。この格差問題をどうするかが、一九全大会で問題になっていた、と。ヒマ人だな、と思いますよ。たくましく生きていますのですよ、中国の民は。そんなやわなものではありません。結構生きることができます。心配する必要は、全然ありません。加々美 僕の生活水準は中国の最低水準と比べて何十分の一ぐらいかの大変さはあると思うんですけど。社会医療や社会保障から考えたら、日本全体は別として私自身の生活には、特別不満はありません。

小島 それは不満などないでしょう。慢性腎臓炎の人の人工透析には年間五百万円ぐらい国が負担していますから。実際、みな何かしら抱えてるわけですからね。いい社会ではありませんか、日本は。こんないい社会、そうはありません

よ。

加々美 そんな大金、自分で払わなければいけないとなったら、多分、今頃はお金がとくに底をついて生きていけないかもしれませんね。

小島 一年も持つはずがありませんよ。それがやれるのですから、日本の社会は立派ではありませんか。いっぽう、中国は子どもを盗んで歩く社会ですからね。

一人っ子政策で子どもがいらないから、自分の家の後継ぎというのか、自分の老後を見てくれる人がいないから、他人の子どもを盗むのです。二歳、三歳の子どもを。それが大問題になっています。盗まれたほうだって、たまりません。涙流すだけではすみませんよ。それでも、あの社会の連中はたくましいですよ。あれこれ心配する必要なんかありません。「三大差別」の解消とか何とかっていつて、これが実現できなかったから毛沢東は失敗した、などと言う必要はありません。そういうスローガンも必要だったのですよ、民を引きつけるためにはね。しかも、一時期はこれで成功しています。で

すから、それでいいんじゃないやありませんか。半年後に駄目になったっていいじゃないやありませんか。そう思って研究していたら楽になりますよ。

加々美さん、もう一冊ぐらい本書けますよ。あまり真面目になつたら駄目なんです。

加々美 実権派という言い方、毛沢東が一九六五年一月にいわゆる「二十三条」で作りに出した言葉ですが、今ごろ実権派という言葉を使う人は、中国にも日本にもいませんね。その意味で文革は終わったのです。今の中国で、ブルジョワとプロレタリアの格差は、本当は相当に大きいと思います。日本でも、財を成した人と中ぐらいの給料がもたらえて何とか生きていけて、老後をまかなえる人、さらに下の人もいます。それに比べた場合、中国のほうが相当の格差があります。日本でも相当の格差ですが、中国の最下層とトップの差は、さらに大きいですね。

小島 中国の最下層の人は、意外とニコニコしてのではありませんか。食べていけますからね。たくましいですよ、あ

その民族は。要するに、社会にはこうした格差があるわけです。昔もあつたし今もある。これを平準化すること、これは、できません。ただ、理想として人類が到達したのは機会の均等だけです。機会の均等をどうやって実現するかが問題なのです。機会の均等があるにもかかわらず、そこへ入れなかつたなら、それは実力の問題でしよう、努力不足だと言えないのです。ところが、中国では、社会的にそうした機会の均等がまだありません。そういう問題について、例えば文革期にどう取り扱われてきたのか、偉い人たちを吊り上げて文革の中で動き回つた連中に、はたして機会均等というような発想があつたのかどうか。そういう視点が、文革が現在から見てどういう意味を持つのか考える際に、必要になるのはありませんか。

加々美 一九六六年秋から六七年春まで紅衛兵の「大串連」(全国的経験交流)というのから始まって、その流れの上上山下郷運動が重なります。その時の人間の社会移動率というのは、大変高いも

のでした。特に僻地の農山村の人民公社に下放された紅衛兵は、一九七〇年代初期、特に一九七一、二年頃には農村の暮らしに耐え切れなくて都市へ舞い戻ってしまいました。

小島 いや、耐え切れなかったのではなくて、大学が再開されようとしたから争って戻ってきたのです。あの時、一六〇〇万人とも言われますが、私の推計では一七〇〇万人の紅衛兵が「下放」されました。どうして「下放」されたのかといえば、それは先ほど言った食糧問題です。都市に配給する食糧がないからです。一人でも都市の人口を減らさなければならなかったのです。そのためには、どういう人を都市から追い払えばよいかということになります。四〇歳、五〇歳の人を追い出すわけにはいきません。それで、都市の進んだ文化を農村に持つていけ、と紅衛兵たちをそそのかしたわけです。文革期に延安に行った時、現地の人々が「明日は下放青年に会います」と言うのです。すると、三人来ましたよ。みな、北京から来た人たちでした。彼ら

に、辛くはなかったか、憎らしくはなかったか、とたずねたら、「いや、そんなことはありません」と、大体そう返事する。自分だったら絶対に文句を言ったな、と思いましたね。都市では配給米がなかったのですが、政府が半年間だけ生活費を出してくれるのです。その後は、農村に行つて食えということでした。つまりは農村の口糧、農民の食糧、他人の食の扶持をついばめ、というわけです。そんなこと、うまくいくはずがありません。こんなことをやるのは無理ですよ。本音は食糧を都市で確保できないから、みな農村に行け、なのです。そこを、都市の進んだ文化を遅れた農村に持つていつて普及せよ、などと何回もホームルームでやられてみないかい。中学生だったら、みなコロコロ行きますよ。

延安の三人に訊きましたよ、農村の仕事はきつかったか。そうしたら、向こうはやはり模範解答が用意されているんですよ。「雨がこう降ってきた時には、むしろの上でこう干して、そうしたら農民たちは穀物を先にして、自分たち

は濡れてもかまわない、私たちはそれを学習しました」とか、いいことを言うわけです。こう言わなくてはいけないという答を用意しているに違いありません。だけど、実態は仮病を装って一人、二人と、知らないうちに逃げて来きたのです。わずか一年半で全員が帰つて来てしまったというわけです。

だから、毛さんのやろうとしたことは無理なんです、無理な政治なんです。毛さんの下で真面目にやった人は大変、官僚として可哀想だったと思います。毛さんの言うようなことは、大体百分の一聞いておけばいいのです。「五・七指示」は立派でございます、本当に立派です。「三大差別」、これもありますから一生懸命努力しましょう、と言つてそつちを向いていけばいいんですよ。

先ほど言つたように、あの苦しい時期、六〇年代に三千万人から四千万人が餓死したともいう時期に、農村はどうやって生きのびたのか、そのことを分析していると、「隠し田」が凄い。まるで映画の「七人の侍」だね。用心棒として

戦ってくれた七人の侍にお礼する時に、お百姓は酒を出しますね。どうしてあれだけの穀物を使って酒を造れるのでしょうか。江戸時代の言葉で「百姓と胡麻の油は絞れば絞るだけ出てくる」っていうのがありますね。それなんですよ。毛さんも同じです。私の経験からしても、そう言えます。私の母親の母親、つまり祖母の長男は東京でも指折りの有名な弁護士でした。その人が戦争中に、祖母のところへ孫を一人連れて帰ってきました。疎開ですね。私の家は両親と合わせて七人でした。この人数が五反歩(約〇・五ヘクタール)で食べていたところへ、二人入ってきて、その叔父さんは一銭も金を出さないといいのです。それは厳しかったね。何でも食べましたよ。そのころ色々な物を食べたから、今でも健康なんでしょうね、旨い物なんてあまり食えなかったから。旨い物を口にする、大体駄目になりますね。私の母も、戦争中のことはよく思い出すといいです。戦時中は供出制度がありましたね。供出命令はさつまいもにだって来ました。その時

には、「金時」とか「太白」とかという旨い物は、決して出しませんよ。「農林一号」、これはまだ食べられます。「沖繩一号」というのは、三回やれば豚だつて顔を横に向ける。そんなでかくて食べられない芋、そればかり供出したといえます。それから豚だつて供出があります。その時には、出す前に二人がかりで豚の口をこじ開けて、水をダーツと飲ませ体重を重くして出すんですよ。当時の新聞には、そういうのはけしからんという記事がありますよ。面白いですよ。そうやって民はちゃんと生きていくわけですよ。いいじゃありませんか、それで。いつかはうまくいくようになるかも知れませんよ。努力ですよ。今の中国に、格差があるとかないとか言っていますが、それで飢え死にする人はいないのですから。心配する必要はありませんよ。加々美 確かにね。誰も飢え死にはしてないから。小島 そういう状況では、もはやありませんからね。加々美 これから一〇年、二〇年経って

も、中国では今と同じように、社会の最底辺近くにいたとしても食べていけないだろうと、確実に予想できます。小島 もしも、飢えるような状況になれば、百姓たちは必ず開墾して、自分で食べる分を作りますよ。加々美 なるほど。小島 だから、そんなことを心配する必要は、全くありませんよ。「五・七指示」は、理念にとらわれて論文を書くとうと思つて骨が折れます。そんな理念はロシア革命の時にはありませんでした。フランス革命の時にも、ありませんでした。アメリカの南北戦争の時も、もちろんありません。中国の毛沢東だけがこれをやり遂げました、と思った人がそう書けばいいんです。そんな理念を真面目に考えるとだめなんです。そこには政治のメカニズムがあるわけですから。私の場合は、そうした論文を書いたことがありませんが、スローガンとか原理、原則というのは、人を動かすための政治家の道具、だということに分かりませんでした。真面目

に考えてしまったんですね。もつとも、私より不真面目な人はたくさんいましたよ。それを今思うと、やはり限界があったんだと思いますね。

加々美 なるほど。そうすると習近平が胡錦濤時代の集団指導体制を全部解消して個人独裁、権力を集中して、これから一〇年は最高権力の座につくという場合でも、何か異変が起きるかどうか、中国社会が変化するか、いやトップの権力構造に変化が起きるとしても、中国社会としては根本的に変わることはないというのが、小島さんの言いたいことですね。

小島 ええ、そうです。あれだけ豊かになればそうでしょう。それに、夢を与えているでしょう。「二帯一路」など、ほんとに夢ですよ。中華民族の再興という。それを受け入れるだけの素地がありますから。それらが実現できるかどうかは別として、とにかく夢を与えているんです。

加々美 そうですね。

小島 政治手法としては、それでいいんじゃないやありませんか。他人がおやりになる

ことだからね。中国の官僚たちは一生懸命、真面目にやっていますよ。あまりケチをつけたいいけませんね。私は、あまりケチをつけません。「二帯一路」とは、他の国の港などに、昔、中国にあった租界のようなものを作っていくんだから。

加々美 「二帯一路」とはまさにそうです。そういう発想ですね。中国の租界を世界中に作っていくというのですよ。

小島 それには、現地の人が目覚めますよ。もう一つは採算が合わないという時が来たら、後退せざるを得ないよね。それまでは、どうぞおやりになって下さい。

加々美 中国人の僕の友人が、「二帯一路」でぜひ一度アフリカへの中国の資本進出を見てきたほうがいいと言っています。まだ、行ってはいませんか。

小島 よしたほうがいいですよ。そんなものまで見る必要ありません。文献だけでもかなり分かるのですから。

加々美 そうですね。確かに。

小島 そんなところまでお付き合いしたら、命を縮めるだけです。命が縮んだら悲しむ人だっているでしょう。

加々美 そうですね。

小島 その人たちのためにも、もう少し生き永らえたほうがいいから。そんな真面目に考えないこと。私は最近は何んでもそうですよ。そんなこと真面目に考える必要ありませんよ。

加々美 確かに。

三好 話もはずんで参りましたが、時間の都合もございしますので、そろそろ終わりにしたいと思います。「文革」に何を見たのか、ということから現在の中国を視野に入れて、非常に面白く聞かせていただきました。本日は、ありがとうございます。

(二〇一七年一〇月二七日)

愛知大学東京霞が関オフィス・ラウンジ)

〔後記〕 本来、おがましくも文革の中国を同時代人として体験した小島・加々美両氏とともに語り合う、「鼎談」にするつもりであった。しかし、小島・加々美両氏の話はずみ、私の出る幕がなくなってしまう。結局、テーマを提示しただけになってしまったが、かえって話はずみ、多方面に発展していった。